

ＩＲ（統合型リゾート）に関する地域説明会（苫小牧会場）質問・意見等

日時：平成 31 年 1 月 28 日（月）14:30～16:30

会場：苫小牧市民会館小ホール

■ 男性 A

苫小牧市を「誘致を表明し積極的に活動している」と説明があったが、市は住民に対し、ＩＲを誘致するとは一言も言っていない。この差は何なのか。また、北海道新聞のアンケートでは賛成、どちらかといえば賛成が 33%、反対、どちらかといえば反対が 65%で反対が圧倒しており、市の説明会でも、反対の意見が多いのに、何故ＩＲを誘致しようとするのか。どうしてもカジノを誘致したいのならば、住民投票を行うべき。苫小牧市長はカジノ誘致の依存症にかかっていると聞いていくらいだ。

■ 道(観光局誘客担当局長)

苫小牧市はＩＲ誘致の意向を示されていると認識している。経済界が誘致の意向を持っていることと、市民の総意としての意向は別物と考えており、地域の皆様のご意見を伺うためにこうした機会を設けたところ。様々なご懸念をしっかりと捉え、道としてしかるべき時期に誘致の判断をさせていただきたい。

■ 男性 B

ディズニーランドを誘致するなら賛成だが、人の不幸を前提にした経済活性化には反対。道の有識者懇談会では誘致に反対する構成員は一人もおらず、誘致ありきで議論を進めているが、道民のお金をいくらかけてこんなことをやっているのか。

ギャンブル等依存症対策基本法が成立したが、ギャンブルをなくして依存症を減らしましょうということなら理解できるが、無制限に近いようなギャンブルを持ってきて、どうして依存症が減るのか。シンガポールではカジノ開業後に依存症が減ったという話があったが、そんなことがあるわけがない。家族や親戚に、経済復興のためにカジノに行きなさいと言えるのか。言えるわけがないだろう。カジノだけは手を出すなと言うに決まっている。博打の寺銭で学校や市営住宅を建てるなんて馬鹿なことをしてはならない。これは倫理の問題である。

■ 女性 A

「たたき台」にある「日本の他地域にない北海道の優位性を活かした、オンリーワンの統合型リゾート」とは何を指しているのか。私はヒグマの研究をしているが、苫小牧市のＩＲ候補地は、ヒグマがよく利用している最も保存しなければならない地域であり、またウトナイ湖に流入する河川の源流部にもあたる。このような場所で環境を破壊する開発を行うこ

とは、「北海道の優位性を活かす」という道のコンセプトにも反する。ヒグマが生息する場所を破壊する余地は、もう日本に残されていない。どうしても誘致したいなら、工場跡地など既に環境が破壊されてしまったところにつくるべき。

■ 道(観光局誘客担当局長)

当然ながら、人の不幸を前提とする経済復興や地域振興の取組を行うつもりは全くない。カジノには競馬等他のギャンブルよりも高い規制が設けられており、仮に I R を誘致する場合には、その上で事業者も高い意識の下で対策を講じることになっている。

また、例えば競馬は特別法により、馬産地の振興や地域振興への貢献を目的とし、ギャンブルの違法性が阻却されており、道自身も推進しているところ。今後 I R を誘致する場合には、道における I R の位置づけをしっかりと示し、道民の皆様にご理解いただくというプロセスが必要と考えている。

環境面については、民間企業が行う通常の開発についても厳格な環境アセスメント等の規制があると承知している。I R については民間が整備する枠組みになっているが、道や自治体が民間事業者との対話によりかなり公共性の強い開発になることを考えると、自治体も開発者として積極的に環境保護の取組を行う必要があると、他の公共事業同様のスタンスで環境面に影響がないような施設整備をする必要があると思っている。I R を誘致すると判断した場合は、そうした対策を一つずつ検討していく。

■ 女性 B

「カジノ誘致に反対する苫小牧市民の会」の一員だが、私は子供の未来にカジノは要らないという立場で意見を述べたい。まず、カジノは大人の問題だと思われがちだが、ギャンブル依存により家庭が崩壊した結果、犠牲になるのは子供たちだ。大人だけの問題ではなく、子供たちがはっきりと犠牲になるのだという視点を持ってほしい。

また、いくら対策をとったとしても、カジノがあれば依存症は生まれる。ある研究者によると、ギャンブル依存の患者の 90% は医療現場に現れないということだが、これらの人は依存症対策をしても治らない。また、日本の依存症に関する医療の第一人者は、講演で「日本の医療の依存症対策は発展途上」と話しており、これから研究をして対策をしていくのでは遅い。ギャンブル依存を生み出さないためには、カジノはいらない。

■ 道(観光局誘客担当局長)

繰り返しになるが、人の不幸を増長する取組をするつもりは全くない。これまで、国や道も含め、総合的、体系的な依存症対策をなかなかとっていなかったという現状がある。I R の誘致にかかわらず、本道においてギャンブルに関する問題を抱えて困っている方を一人でも少なくしようと検討しているところなので、ご理解いただきたい。

■ 男性C

I Rの誘致に関して、道も苦小牧市も誘致の判断をしていないということだが、いつ判断するのか。

■ 道(観光局誘客担当局長)

国がまだスケジュールを示しておらず、判断時期についてははっきりとしたことを申し上げることはできない。国の動きを見ながら、判断を留保している状況。

■ 男性D

本日の進行についてだが、質問者がいる間は、会場の時間の許す限り質問を受けてほしい。依存症について、苦小牧市内の精神科の看護部長が、講話において「カジノによるギャンブル依存症の患者には対応できないし、未知数なので、精神科の関係者としてやめてほしい。反対運動をもっと盛り上げた方がいいのでは」と話していた。

環境面については、I Rを整備し、膨大な施設の中で地下水をくみ上げていった場合、ウトナイ湖などへの影響はどうなるのか。また、候補地周辺には多くの貝塚があるが、土地の調査はどうなっているのか。

■ 道(観光局誘客担当局長)

会議時間については、目安として30分程度延長し、意見交換の時間を設けさせていただきたい。

環境については、I Rを誘致する場合、道・苦小牧市としても環境面の影響を把握した上で、プロセスの透明性を確保した上で、皆様にもお示ししながら議論されていくものだと認識している。

■ 女性C

I Rには賛成。苦小牧市は少子化が進み、税収の減少や様々な課題がある中、外から人を呼ばなければならないと感じている。

ギャンブル依存症については、依存の原因はパチンコが7、8割と聞いている。また、パチンコの客はスリッパ履きにジャンパーを着た高齢者が多いが、こうした客層が本当にカジノを利用するのか疑問がある。

苦小牧市は市営住宅の老朽化や少子化による小学校の規模縮小など、多くの課題を抱えており、反対派はもう少し歩み寄り、苦小牧市の将来のために何をすべきか話し合わなければならない。

苦小牧港があり、新千歳空港も近く、これほどアクセスの良いところは他にない。道は誘致の姿勢をはっきり示してほしい。

■ 道(観光局誘客担当局長)

道全体としても、人口減少や二次交通など様々な課題があり、こうした課題解決の一つの可能性として、IRの誘致があると「たたき台」に整理させていただいた。一方、IR誘致により、その課題が増幅されるという懸念も多々いただいております、皆様のご意見を伺いながら、いかにプラス面を高め、マイナスの影響をゼロに近づけていくことができるか今後さらに検討してまいりたい。

■ 男性E

道が苦小牧市の現状をどれくらい知っているのか疑問に感じる。全道のパチンコ店の数が559店舗という数字が上がっていたが、苦小牧市は非常に多いはずだ。パチンコ依存による家庭崩壊が起こっているという話もある。

また、初めはカジノ法案という言い方をしていたが、カジノという言葉が良くないから途中でIRという新しい言葉をつくり出したのではないか。IRにカジノがあることが問題になっているのだから、カジノのないIRを検討することはできないのか。

■ 道(観光局誘客担当局長)

IRにはこれまでにない規模と質を求められるところであり、常に再投資を繰り返しながら運営していく必要があり、収益源を何らかの形で求めなければならない。そのため、カジノを健全な娯楽として楽しんでいただいた上で、IR全体の収益につなげていこうとするもの。カジノなしにリゾートを誘致したいという考えは理解できるが、そうした提案をしても、手を挙げる事業者がいるとは考えにくく、限界があると考えている。

また、カジノ法案という略称は、国も含めて正式に略称として使ったことはないと認識している。

■ 男性F

23日の札幌会場において、IR整備法の国会審議における白参議院議員の「海外カジノ事業者は、数年で1兆円以上の投資が回収ができるという見込みを立てている。つまり10万円負ける客が1,000万人必要となり、その大部分が日本人である」という趣旨の反対討論について、道の考えを伺う。

「カジノIRジャパン」という情報サイトに、23日の札幌での説明会について「一部の反対派が意見を述べた」旨記載があったが、一部ではなく8割方反対の意見だった。運営会社に抗議の意見を出すべき。

■ 道(観光局誘客担当局長)

IR整備法に関する国会議論において、海外のIR事業者には収益が流出してしまうだけ

ではないかとの意見があったことは承知している。

道が I R を誘致する場合、メインターゲットは海外の富裕層と考えており、これらの方々
に合法・健全な形でカジノを楽しんでいただき、カジノにおける収益を I R 全体に回してい
くことは必要と考えている。日本人の多くの皆様を不幸にするということは当初から想定
していないことをご理解いただきたい。

「カジノ I R ジャパン」というサイトがあることは承知しているが、道から接触したこ
とはなく、民間の事業者独自に情報収集しているものと認識しており、道として特段の対応を
行う必要はないと考えている。

■ 女性 D

「たたき台」に、インフラ整備等費用負担について、地元自治体や事業者と検討するとい
う記載があるが、事業者が沢山負担する気がするよう仕向けて、実際は住民が多くの負担
を負い、税金や水道料金が上がるのではないかと心配している。

カジノ管理委員会は委員長と 4 人の委員で構成されるとのことだが、たった 5 人で全国
のカジノの許認可や監督ができるのか疑問に感じる。

男子バドミントンの桃田選手は海外の I R でカジノにはまり、国内の違法カジノなどで
賭博をするようになったと報道されている。このように、入り口は合法なカジノでも、一度
はまってしまうと、将来有望な若者がギャンブル依存になり苦しむことになることもある。
依存症のことを甘く考えないでほしい。

■ 道(観光局誘客担当局長)

I R を誘致する場合、インフラ等の費用負担についても、事業者の選定や実施協定の締結
等のプロセスにおいて協議する必要がある、透明性のある形で今後議論を進めることにな
る。誘致の判断を行っていないため具体的な議論されていないが、想定される収益を考慮し
た上で適正な負担を検討していくものとする。

内閣府の外局として設置されるカジノ管理委員会については、委員は計 5 人だが、事務局
全体では 100 人規模になると聞いている。

カジノの依存に関する事例は道としても把握しているところ。繰り返しになるが、I R の
設置によって不幸な方を増やすのは言語道断と考えており、規制と取組を同時並行で進め
ていくことが設置する場合の必須条件であると認識している。例えば、I R 事業者からは、
カジノ以外の I R 従業員全員に依存防止対策の教育を行うなどの話もある。様々なアイデ
アを伺いながら、どのような対策が重要あるいは効果的で、不幸な事例を生み出さないか、
具体的にしっかりと検討させていただく。

■ 男性 G

I R がそんなに良い事業なら、なぜ札幌は立候補しないのか。

I Rができれば商工業者は良いかもしれないが、一般市民が胸を張って誇れるのか疑問がある。どうせ、苫小牧は博打の街だと未来永劫言われることになる。カジノで生まれた収入を学校や市営住宅、ライフラインの維持につぎ込んでも、自慢になるわけがない。

行政に携わる者には、クリアさと純粋さがなければならない。また、社会に安心と幸福をもたらす事業を行わなくてはならない。

■ 道(観光局誘客担当局長)

I Rを誘致する場合、道民が北海道のランドマークとして誇りを感じるような施設でなければならないという点は同感である。そのためには、市や地元経済界の方々と共にコンセプトをつくり、事業者の方とも対話しながら、皆様にご理解いただけるものとする必要がある。地域の皆様が胸を張って海外や道外の観光客をお迎えできるものでなければ成り立たないと思っている。

札幌市については、札幌市としての施策の判断があるため、申し上げる立場にない。